

1 資源・エネルギーが循環するまちを目指しています

■豊かな環境を引き継ぐ

太陽光などの自然エネルギー、市内で発生する廃棄物やバイオマスなどをエネルギーと捉えて有効に活用すれば、豊かな環境を次世代に引き継ぐことができます。

市は地域内で資源やエネルギーが循環する「資源・エネルギー循環型」のまちづくりに向けて、昨年11月、庁内に推進本部を設置。現在、エネルギー資源の実態把握や廃棄物の減量化、エネルギーの活用による施設のあり方などについて、調査・検討を進めています。

■廃棄物を減らす

廃棄物の中には、まだ使える物や資源としてリサイクルできる物が含まれています。今以上に分別を徹底すれば、廃棄物は減り、埋め立て処分地を長く利用できます。

■森林資源などを生かす

市は今年度、災害に強く、エネルギーや経済が好循環する豊かなまちづくりを目指し、間伐材、伐採端材などの森林資源や家畜排せつ物を生かしたバイオマス産業都市構想を策定します。

市民や関係事業者などで構成する一関市バイオマス産業化推進会議を設置し、将来の市のビジョンについて検討と協議を行います。

バイオマス産業都市構想の基本理念は▼エネルギーと、それを生み出す費用が地域内で循環し、地域全体が潤うまち▼廃棄物のない優れた環境を誇りに思えるまち▼里山を中心とする農山村景観の保全が地域の産業として定着するまち▼近隣の市町との共生による災害に強く、エネルギーを自給できるまちとしていきます。

廃棄物などをエネルギーとして活用 全国の先進事例を紹介します

推進本部では、生み出されたエネルギーを活用している複合施設などを視察しました。

バイオマス発電施設 「南但ごみ処理施設」(兵庫県朝来市)

可燃ごみから生ごみと紙ごみを選別する装置を国内で初めて導入。分別することで、焼却ごみが減少した。生ごみや紙ごみはメタン発酵させて発電に、焼却灰はセメント原料に活用している。



焼却灰の資源化 「三菱マテリアル(株)岩手工場」(東山町)

セメントを製造する同工場では、焼却灰や下水汚泥などを原材料の一部に使用。燃焼工程では、廃プラスチックや木くずなどを熱エネルギーとして活用し、廃棄物を有効に活用している。



エネルギー活用施設 「スポパーク松森」(宮城県仙台市)

仙台市のごみ焼却施設に隣接。温水プール、温浴施設、マシンジムやテニスコート、フットサル場の温水と電力を、焼却によって発生する余熱や発電に伴う電力で全て賄っている。



■三市共同で東京オリンピックのメダルに回収金属の活用を提案

本市、青森県八戸市、秋田県大館市の市長らは6月10日、東京オリンピック・パラリンピックのメダルに小型家電などの回収金属を活用するこ

とを同競技大会組織委員会に共同で提案。三市は、小型家電回収ボックスに共通のポスターを掲示。使用済小型家電のリサイクルを進めている。

「資源・エネルギー循環型」のまちづくりに関して詳しくは
☎本庁生活環境課 ☎8341

2 ボランティアスタッフとしてイベントを応援 「いちのせきイベントサポーター制度」

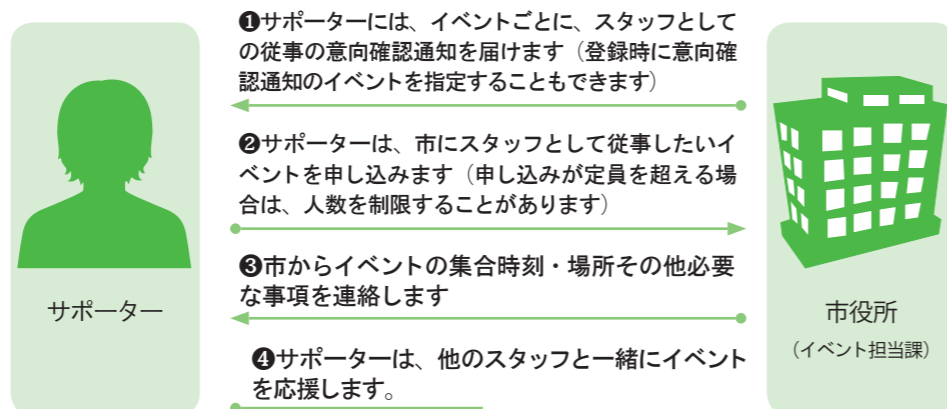
■イベントサポーター制度は

あらかじめ「いちのせきイベントサポーター（以下、サポーター）」として登録した人に、市内のイベント運営に加わってもらう制度です。イベントを通じ、地域の魅力を見つめ直し、みんなで盛り上げる一体感と成功させる達成感を共有することによりイベントの参加者同士の交流やコミュニティ活動の活発化を目指しています。

■サポーターの登録方法

サポーター登録は、「本人による申込み」か「会社、学校、団体などからの推薦」のいずれかの方法で行います。

■イベントを応援するまでの流れ



サポーター制度について詳しくは
☎本庁まちづくり推進課 ☎8671

Comments



伊藤桃子 千厩高2年

友人5人で参加しました。みんなの考えには、私には思いつかない意見もあり、参考になりました。若い人も高齢者も住みやすいまちになってほしいです。



佐藤嘉宜 一関二高3年

3月の福祉ワークショップにも参加。テーマについて、自分の意見を話せて良かった。意見をまとめることも勉強になりました。「自分たちが地域を作っていく」という気持ちで、まちづくりに関わっていきたい。



Pick Up 高校生の発想で描く未来の一関 まち・ひと・しごとを考えるワークショップ

「まち・ひと・しごとを考える高校生によるワークショップ」は6月20日、一関図書館で開かれ、参加した高校生がまちづくりのアイデアを出し合いました。

市は、まちづくりの指針となる「市総合計画」と将来にわたって活力ある地域を創る方策を盛り込む「まち・ひと・しごと創生総合戦略」の策定を進めています。ワークショップは、2つの計画に高校生の若い発想を生かそうと開催。市内の高校に通学する43人が、将来の一関のまちづくりについて熱心に話し合いました。

目指すまちのテーマは「世界で一番住みやすいまち一関」。その

の実現に向けて「住みたいまち」「子育てしやすいまち」「若者・女性が集うまち」「求める仕事」の4つの分野について8グループで話し合いを行いました。

話し合いでは「楽しいイベントや行事がある」「ご近所つきあいがある集まる場所がある」「子育て世代が悩みを共有できる仕組みづくり」「地元で進学・就職ができる市に」などの意見が。そのほか「空き家をシェアハウスにしては」「歩くと音がでる歩道を設置しては」などの案が出ました。

参加した高校生たちは、互いの意見に耳を傾け、明日の一関に思いを巡らせていました。

総合戦略に幅広い意見を反映 まち・ひと・しごと創生有識者会議が初会合

①首都圏などへ集中する人材の流出を抑え、若い世代の子育てを支援するなどして人口の減少を克服する②地方が将来にわたって活力ある社会を創る一ことを目的に、昨年11月に施行された「まち・ひと・しごと創生法」。地方公共団体は「人口ビジョン」と「総合戦略」を策定することになっています。

市は、2月に「まち・ひと・しごと創生本部」(本部長・勝部修市長)を設置。今年度中に策定する人口ビジョンと総合戦略の検討を進めています。この戦略などに、各界の意見を幅広く取り入れるため、6月24日に「有識者会議」の初会合が開かれました。

会議は、産業、行政、教育、金融、労働や報道など各種団体の関係者17人で構成。座長に県立大地域連携室特任准教授の千葉実氏を、副座長に一関コミュニティFMの河合純子放送局長代理を選出しました。勝部市長は「『一関だからできる』ものを打ち出していかなければ」と話し、委員の活発な議論を期待しました。

会議では、事務局の政策企画課から市の人口の推移と見込みが説明された後、人口減少対策について意見交換。今後のスケジュールや進め方について確認しました。同会議は、10月までに4回開かれ、市に提言を行う予定です。



1



2

- 1_委員からさまざまな意見が寄せられた
- 2_勝部市長から委員へ委嘱状が手渡された